



『頭のいい泥棒』



齊藤 想

今夜は曇りで、月も顔を出せなかった。真っ暗な公園の中に、家と間違えるほど小さい市立美術館があった。予算の都合からか、有名芸術家の絵はない。世間ではまったく知られてない地元出身の芸術家の作品だけが、ちらほらと展示してあった。

真夜中の美術館に、二つの足跡が響いた。当然、客ではない。足音は、裏口からまっすぐ展示室に向かった。

「実に簡単に入れる美術館ですね、大将。いまだき鍵をポストの中に入れて置くなんて、子供でもしませんよ。それにしても、こんな貧相な美術館に、有名な絵なんて置いてあるんですかね」

そういいながら相棒は、はがれかけの壁紙を、引きちぎった。

「まったくもって、お前は馬鹿だな。有名な絵は厳重に管理されてら。それに、もしうまく盗めたとしても、売りさばく時に盗品だとばれちゃう」

「なるほど。そりゃもつともでき。しかし、いくら盗みが簡単でも、高く売れなければ、時間の無駄じゃあないですかね」

大将はため息をついた。

「お前は馬鹿な上に、頭も固いなあ。いいか、ここは現代美術を中心としている美術館だ。現代美術ということは、古典と違って、評価が定まっていないんだよ。つまり、今は評価されなくても、将来的に価値が出る絵が置いてあるかもしれない。そういう隠れた名作を盗むんだよ。いい絵なら、自分の知り合いの画商が、高値で売りさばいてくれるさ。しかも無名だから、だれも盗品とは気づかぬえ」

相棒は、目をまん丸くした。

「さっすがは、おいらの大将。考えることがちがうや。けどさ、おいらには絵なんてわかんぬえや」

「おれにまかせとけて。こう見えても、昔は画家を目指したこともあったんだぜ」

大将は、ぐるりと部屋を見渡した。どうやら、すべて人物像らしい。なにかしらの、企画展覧会でもしているに違いない。絵がすべてクレヨンで描かれているのが珍しい。

相棒は、懐中電灯をつけて、目の前の絵を照らした。

その絵は、真ん中に誰かの横顔らしき物が、荒いタッチで殴り描きされていた。福笑いのように、顔の部品が飛びちっている。なぜか、画面の端にチューリップが、違和感たっぷりに描いてある。

「ぷぷぷ、こいつは何ですかねえ。誰かの似顔絵のつもりですかねえ。まるで、大将の落書きじゃあないですか。おいらでも描けそうだ」

相棒はふざけて大将が絵を描くふりをしたが、大将の目がきつくなるのを見ると、あわてて腕を下ろした。

「はあ。まったくお前は芸術を理解できない人間だな」

大将は、絵の四隅をなぞるように見回した。

「これはジャコメッティーを意識しているな。いいかい、つまり絵の対象について、“これは顔だ”という先入観をすてて、本当に自分が見たまま描くんだよ。これは、なかなかの名作だ

」

「んん、ちりめんじゃこが、なんですか」

「ジャコメッティーだ、この馬鹿もん。現代美術を盗もうというのに、そのくらい勉強しておけ」

「どうせおいらには、わかんねえよ」

相棒は、口をとがらせながら、隣の絵に光をあてた。

「ありゃ、これはひどいや。顔が途中でひん曲がってるよ。こりゃ傑作だな」

大将は、ため息をついた。

「お前の目はふしあなか。これは、まさにブラックだと言わんばかりじゃないか」

「黒がなんですか。この絵のどこにも、黒は使われていじゃないっすか」

「ちがう、ちがう。ブラックとは画家の名前だ。つまりは空間を自由につかう事によって、顔の全面だけでなく、上も下も全部描ききろうという意欲的な作品だぞ」

「あー、そうですか。ごたくはいいから、さっさと盗む物を選んでくださいよ。どうせおらは芸術などわかりやしませんよ」

大将は、次々と相棒に指示を出した。相棒がそれに合わせて、テンポよく絵を袋にしまい込む。美術館が、あっというまに建物だけとなった。

「さあ、これだけ盗めばいいだろう。とっとと、引き上げるか」

「そうっすね。大将が言うのだから、袋の中は名作そろいっすよね」

二人は大急ぎで、美術館から姿を消した。

次の日、美術館の館長は、空になった部屋の中で呆然としていた。

「まいったな。せっかく子供達が楽しみにしていた展覧会が開けなくなったぞ」

館長は子供達が泣く光景を想像して頭を抱えた。副館長も予想外の事態に直面して、どうしたらいいのか迷っている。

「本当に困りましたね。それにしても、だれが幼稚園のパパママ似顔絵コンテストの作品を盗むんですかねえ」